Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-01

インドの都市問題（２）：中都市ビィジャヤワダのスラム

二木，敏篤

(Citation)
兵庫地理,34:46-57

(Issue Date)
1989-03

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002366

インドの都市問題 (2)

—中都市ビィジャヤワダのスラム—

二　木　敏　篤

1. はじめに

発展途上国におけるスラム研究は専ら大都市に集中しており，中小都市についてはほとんど対象となっていない。その理由として，発展途上国の首都を中心とする近年の大都市圏の人口急増と，それに伴い都市圏全域に拡散するスラム地区の悲惨ともいえる実態の究明に主眼がおかれてきたことがあげられる。それは当然といえるが，中小都市に決してスラム問題がないためではない。しかし，中小都市への人口集中が大都市ほど顕著でなく，そのためそのスラムがあまり大きな社会問題として注目されてこなかったことに一因があると思われる。もちろん，インドの中小都市にもスラムが存在しないのではなく，その研究は大都市と同様に重要である。この数少ない中小都市のスラムの研究のなかで注目すべきは K. Ranga Rao と M. S. A. Rao（1983）によってなされたアンドラプラデシュ（Andhra Pradesh，AP と略称）州ヴィジャヤワダ（Vijayawada）市のスラムを幅広い視点で分析した研究報告である。そして，この研究の基本データとしては 1971年と 74年に実施された V. L. S. P Rao と R. Ramachandran（1984）らによるヴィジャヤワダ市の社会経済調査と，両 Rao により実施された Bhaskara Rao Peta（ペータと略称）スラムの標本調査が用いられた。そして８ケ月にわたるペータ実地調査に基づきまとめられた貴重な報告である。本稿はこの両 Rao の研究報告を中心とする文献の分析であり，できうれば今後の実地調査を期するものである。

なお，Ramachandran（1976）は上記社会経済調査を用いてヴィジャヤワダの都市の内部構造を研究したが，そのなかで同心円理論が住宅所有単位，世帯規模に，扇形理論は世帯主の教育程度，部屋数によく適合することを明らかにしている。

2. ヴィジャヤワダ市の概観

ヴィジャヤワダ市はインド半島の中央部，ＡＰ州に立地する。州東部のベンガル湾沿岸部で，クリシュナ（Krishna）川が片麻岩の丘陵を1,190 mの幅で開削し，そこから東へ川は幾条にも分流する。このクリシュナ川の堆積作用により沖積平野が形成されたが，特に沿岸部ではマングローブの茂るラグーン内部の埋積によるデルタが発達した[1)2)]。ヴィジャヤワダ市はこの丘陵と沖積平野の地形変換点に位置し，海岸から72 kmを隔てている。

デルタ地域は洪水が頻発し，災害多発による貧困地域であった。1855年からヴィジャヤワダ市に近く，クリシュナ川にダムが建造されて洪水防御に成功する。その結果，肥沃な農業地帯に変貌を遂げる。19世紀後半にはカルカッタ（Calcutta）からマドラス（Madras）に通ずる幹線鉄道が開通し，更に内陸部のＡＰ州都ハイダラーバード（Hyderabad）やテレンガナ（Telangana）地方とも鉄道で結ばれ，交通が便利になると，クリシュナデルタ地域の都市化は急速に進展する。デルタ部の都市人口は1871年の99,400人から1901年には153,600人と55％増，更に1961年には903,000人で1901年から61年までの増加率は486％となった[3)]。なかでもヴィジャヤワダ市は南セントラル（Southern Central）鉄道とハイダラ-バードを結ぶ鉄道のほかにいくつかの支線の終着駅ともなり，全国でも有数の大規模駅に成長した。この他にも幹線道路や運河も発達し，バス交通の要地となっている。そのため，中央政府や州の各種行政機関が設置され，放送局や新聞社[4)]に映画フィルム配給会社などの文化機関も集中している。なお，クリシュナデルタの豊かな農業地帯を背景に，穀物，野菜，果実，ゴム，ゴム製品に畜産物，魚介類などの集散地として商業が発達し，農産物輸出の中心地としても重要性を増してきた。工業は比較的規模は小さいが，近年になってその発展ぶりが注目されている。そのため，ヴィジャヤワダ市は州都ハイダラバード，大港湾都市ビシャカパナトム（Visakhapatnam）に次ぐ人口 544,958人(1981

表1　ヴィジャヤワダ市の人口変動

年次	人口	人口増加率
1871	8,206	—
1881	9,366	14.0
1891	20,224	115.9
1901	24,224	19.8
1911	32,867	35.7
1921	44,159	34.4
1931	60,427	36.8
1941	86,184	42.6
1951	161,198	87.0
1961	234,360	45.4
1971	344,607	47.0
1981	544,958	58.1

年）の都市となり，クリシュナデルタ最大の都市に発展してきた。

市街地はクリシュナ川左岸，丘陵の一部が河食作用で切り離された幾つかの孤立丘が点在する平地部に形成されている。市の発展は人口変動にもよく示されており（表1），一貫して増加しており，市街地も鉄道沿線から三条の運河沿いに主として東部に拡大したが，この急激な都市の成長がスラム地区を形成させる原因となる。

3. ヴィジャヤワダ市の主要スラム

市内には11ヶ所のスラム地区がある。そのうち9スラムは「自然発生的スクォッタースラム（Spontaneous squatter slum）」であり，2スラムが「組織化スラム（Organized slum）」と分類される。後者は1962年に市内のスラムに居住する1,784世帯をスラム再生計画の一環として移住させ，新しく市の東北端に割り当てられた住宅地区で，Mutyalampadu と Mutyalampadu Housing Colony と呼ばれている。このスラムは面積も広く，道路もかなり幅広くつくられている。他の9スラムに比して人口密度も比較的低い。しかし，その位置が市の縁辺部にあるため住民に評判が悪く，元のスラムに舞い戻る者が多く，市の計画は失敗とみられている。9ケ所の「自然発生的スクォッタースラム」は，総人口で54,764人（市人口の17.4％），面積は3.06㎢（市面積の11.9％）で，スラム地区の人口密度は全市平均に比べて高密であるが，これは他都市のスラムとも共通する。そのうち旧市域には Chitti Nagar, Talor Peta, Winch Peta, Baptist Peta の4スラムが分布するが前3者はほとんど連続している。新市域には

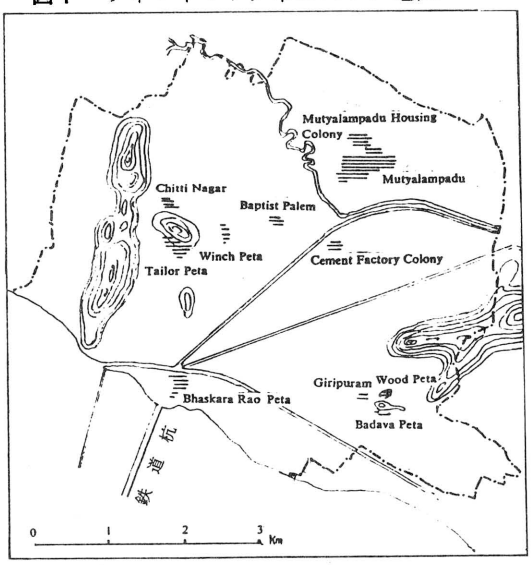
表2　ヴィジャヤワダ市のスラム地区（1971年）

スラム名	面積	人口	人口密度
Chitti Nagar	0.45	4,376	9,691
Tailor Peta	0.64	12,215	19,218
Winch Peta	0.14	12,992	95,691
Bhaskara Rao Peta	0.67	7,887	11,718
Baptist Palam	0.37	10,114	26,917
Cement Factory Colony	0.54	2,380	4,800
Giripuram	0.02	1,190	49,666
Wood Peta	0.10	2,904	30,405
Badava Peta	0.13	1,316	9,869
（小計）	3.06	55,374	17,889
Mutyalampadu Housing Colony	0.23	6,251	27,190
Mutyalampadu	4.44	2,337	526
（総計）	7.74	63,962	8,190

Cement Factory Colony, Giripuram, Wood Peta, Badava Peta, Bhaskara Rao Peta の5スラムが立地する。このなかで後で詳述する Bhaskara Rao Peta スラムを除く8スラムについて概観する。

Chitti Nagar　旧市の北部寄りで住宅地区にあり，スラムの形成期は1930年代である。人口密度は市の平均よりやゝ低く，住宅は堀立小屋が約460戸，木・煉瓦造が400戸ほどで，やゝ好条件のスラムである。地区内には排下水施設はなく，舗装されていない道路は雨季になると泥濘の悪路となる。住民のカースト構成は指定カースト[5]の Mala が450人（10.3％）以上，次いで Madiga[6] が320人（7.3％）と多い。指定部族の Erukula は100人ほどで，この他に中層カーストに属する Nagara, Gauda, Telaga などが居住している。

図1　ヴィジャヤワダ市のスラム地区



この中層カーストは旋盤工や野菜・果物販売に従事する。指定カーストはリキシャ車夫や肉体労働者として日銭を稼ぐ貧困層である。住民の出身地は Krishna, Ongole (Prakasam), Guntur, Visakhapatnam 県が多い。

Talor Peta　Chitti Nagar とは小丘を狭んでその南部に立地する。このスラム形成は県収税吏 Talor 氏がここに来住して1910年頃に始まった。地名も彼の姓に由来する。約1,000戸の堀立小屋と800戸の木・煉瓦造住宅がある。住宅地は排下水施設の無い低湿地から次第に丘陵斜面に拡大している。道路は3つを除いて未舗装である。住民のカースト構成はMalaが1,350人(11.1%), Madiga 1,660人(13.6%), Pakee[7] 500人に下層カーストの Relli か150人を数える。これらのなかではキリスト教に改宗する者も多くなっている。中層カーストでは Nagara, Telaga が多い。住民の職業はリキシャ車夫, 日雇労働者, 屠殺業者と市清掃夫など。中層カーストは小売商にムータ(Mutha[8])労働者が多い。住民の出身県は Krishna, Ongole, Guntur, Visakhapatnam があがる。

Winch Peta　前2地区の東隣, 市内で最も早く市街化された市の中心地区に所在する。鉄道駅や中心商店街にも近い。人口最大, 人口密度もスラムでは最稠密地区である。住宅は堀立小屋が1,200戸, 木・煉瓦造住宅740戸ほどで, ここも排下水施設なく, 舗装道路も2本のみ, 雨季には全域が冠水する。イスラム教徒がスラムの最大グループで3,900人で25%を占める。小売商や肉屋が多い。この他に指定カースト・指定部族か17%, そのうち Mala 850人(6.5%), Madiga 850人(3.8%), Yerukula 500人(3.8%), Relli 310人(2.4%)などが住居する。

住民のかなりが鉄道の駅員や赤帽, そして指定カーストは主にリキシャ車夫や日雇労働者として働いている。出身地は Krishna, Guntur 県が多い。

Baptist Palam　鉄道駅に近く, 北に鉄道用地, 北東部が商業・住宅地区となっている。スラムの形成は1920年から, 1,000戸ほどの堀立小屋と800戸の木・煉瓦造住宅がある。地区内には排下水施設なく, 水溜りの多い低湿地である。道路は2つの他は舗装されていない。住民の半数はキリスト教徒で, その多くは指定カーストの人々が改宗している。地区名もそこに建立されたバプチスト派教会に由来する。次いで多いのが指定カーストで人口の1割を占める。住民の職業は駅の赤帽が多い。他に石灰焼き, リキシャ車夫, トラック運転手などである。キリスト教徒の50名は教師として勤務している。出身地は Krishna, Ongole, Guntur 県が多い。

Cement Factory Colony　セメント工場と木材置場の周りに拡がる市内唯一の「工場地区スラム」で, 人口密度は9スラムの最低である。スラムの形成は最も新しく1950年以降である。336戸の堀立小屋と147戸の木・煉瓦造住宅からなる。地区内に道路も排下水施設もない。住民の約400人(17%)は指定カーストで, 100人の Yerukula (4.2%)と500人(21%)のキリスト教徒が生活するが, 中層カーストの Telaga, Kamma, Nagara と下層カーストの Reddi も含まれる。住民の大部分はセメント工場で働き, その他には木材置場でムータ労働に従事している。出身県は Krishna, Ongole, Guntur 県が多い。

Giripuram　市の南東部に位置し, 1935年からスラム化が進展する。Winch Peta に次ぐ高密地区で, 132戸の堀立小屋と16戸の木・煉瓦造住宅からなる。1年を通じ宅地, 道路に水溜りの消えない低湿地で, 特に雨季の状況は酷い。道路は狭く入り組んでおり, もちろん舗装はされていない。住民は Mala 50人(4.2%), Madiga 350人(29.4%)のほか他の指定カーストとキリスト教徒からなっている。職業は皮革工, リキシャ車夫, 日雇労働者が多く, 一部ではあるがタクシーやトラック運転手として働いている。出身県は Ongole, Guntur, Nalgonda, Khamman 県が多い。

Wood Peta　市の南東部にあり, Giripuram と同様に1935年からスラム化が始まった。30年代には市内に多数の人口流入があり, 県収税吏 Wood 氏が流入者のために新しく開発した地区である。256戸の掘立小屋と50戸の木・煉瓦造住宅からなっている。地区の環境は他のスラムに比べて清潔で, 非スラム地区と比べて遜色のない住宅も多い。排下水施設こそないが丘上にあるため問題はなく, 主要道路は比較的幅広く, 舗装されたものが多い。住宅のかなりは道路沿いに建てられている。住宅の密集地区はごく一部にすぎない。住民の25%は

キリスト教徒で，この他に指定カースト・指定部族が多い。この指定部族のための福祉施設としてホステルが1ケ所設置されている。住民はリキシャ車夫や日雇労働者が多いが，タクシーやトラック運転手，それに教師もかなり住んでいる。出身地は Krishna, Ongole, Guntur 県が主である。

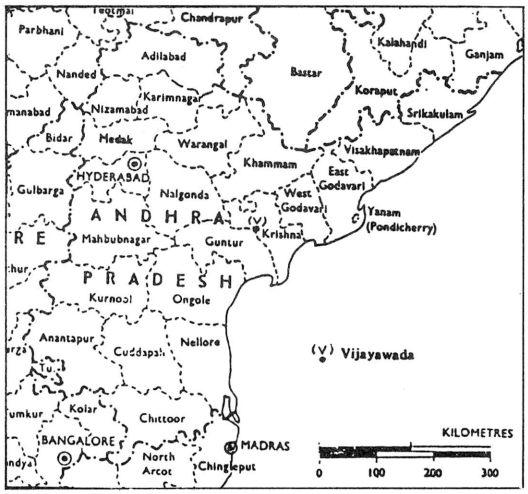
Badava Peta　1940年頃に形成されたスラムで，245戸の掘立小屋と30戸の木・煉瓦造住宅がある。土地が低く，排下水施設ももたぬため低湿地となっており，未舗装の道路はよく浸水し，生活環境は劣悪である。住民構成は Mala が600人（46％）と半数に近く，これに次ぐのが Malaから改宗したキリスト教徒である。中層カーストの Telaga, Kamma, Reddi も含まれている。住民の多くは州道路運輸公社と鉄道の機械工，整備工として勤務している。この他に約40名の教師にリキシャ車夫，日雇労働者もいる。出身県はKrishna, Ongole, Guntur, Khamman 県が多い。

以上の8スラムの状況から，その出身地は近隣諸県のほかに Nalgonda, Visakhapatnam 県など州内に限られるがかなり広範囲に拡がり，ヴィジャヤワダ市の人口吸引力がかなり大きい地方中心都市たることを示している。スラム住民の大多数は Mala, Madiga を主とする指定カーストとその改宗者であるキリスト教徒，それに Yerukula, Relli, Pakee など指定部族も多い。この指定カースト・指定部族の構成比率が高いことはインド都市のスラムに共通する[9]。この他に2スラム地区にはイスラム教徒が集中している。ヴィジャヤワダ市のスラムでは中層カーストの Nagara, Telaga, Kamma, Reddi もかなり居住する。下層カーストでは Vaddera が大部分を占めている。

スラム住民の職業構成は地区周辺の社会・経済活動をよく反映する。鉄道沿線，特に駅に近接するスラムではかなりの人員が鉄道関連の職場で働いている。商業地区に近接するスラム住民はムータ労働や日雇労働に従事する。しかし，一般的にいって農村から流入した人々のほとんどは教育，技術などをもたず，従って未熟練労働者であり，不安定かつ低収入のため貧困層が多い。

スラムの住居区は同一カーストあるいは同一宗教の信者が集中居住する，いわゆる住み分け構造をもつことに特色がある。このことは，スラムが農村的性格を維持し続けていることを意味する。

図2　アンドラプラデシュ州



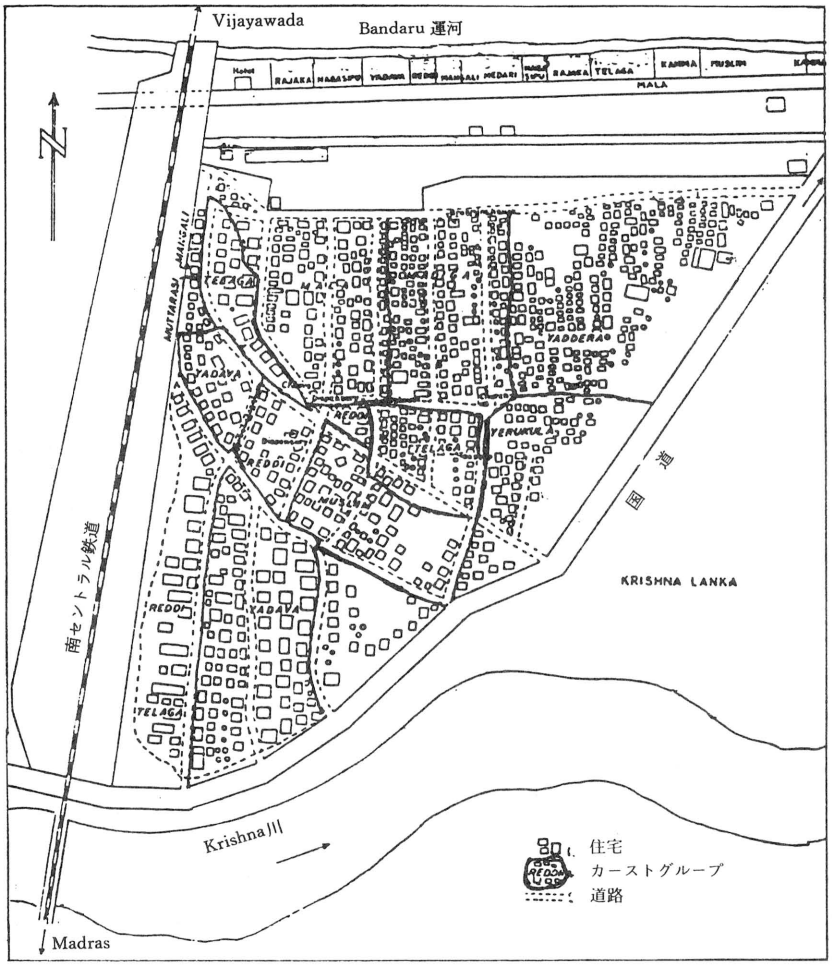
そして，そこに仲間意識が生じ，住民は団結力を強化する。スラムの生活環境の劣悪さはすべてのスラムに共通するが，そこでの生活にアメニティを求める状況は全くないといってよいし，行政当局も不法占拠地区として最低限の生活必需施設すら提供する意志をもっていない。ヴィジャヤワダ市のスラムでは Wood Peta だけは立地条件がすぐれており，比較的良好な環境にある。住宅についても，やゝ良好な木・煉瓦造住宅に居住するのは中層カーストであり，指定カーストや指定部族は一般に雨露をしのぐだけの掘立小屋に住む者が多い。

4. Bhaskara Rao Peta slum

「自然発生スクォッタースラム」の1つである Bhaskara Rao Peta スラムは，市の中心商店街に近接し，北部に Bandaru 運河，東北から南西に通ずる国道を狭んで東部に Krishna Lanka，西部には南セントラル鉄道が南北を走っている。そして南部をクリシュナ川が東流する。このように周縁部から完全に囲繞され，どの方向にも地域を拡張できる余地はない。その面積は0.67㎢でスラム中の第2位，人口は7,887人で第4位，人口密度は1㎢当り11,718人でこれは第7位となっている。この地区はおよそ半分を占める鉄道用地と道路建設局用地を占拠してスラムが形成された。鉄道局は再三住民の立ち退きを図るが成功していない。

このスラムの形成時期は19世紀末で，1900年頃からはMala, Madiga, Vaddera カーストに属す

図3　Bhaskara Rao Peta スラム地区



る人々が Guntur, Ongole 県から新天地を求めて移住し，当時，空地であったこの地区を占拠して掘立小屋を建設する。その後，市内に居住していた指定カーストが上層カーストにより居住地を追いたてられ，同一カーストの住民を頼ってこの地区に移り住んでスラムは拡大していく。

やがて Krishna, Ongole, Guntur 県，更に遠隔地の Khammam, Nalgonda 県からも農民がスラムに流入する。特に1940年代以降に血縁やカーストのルートで多くが集住して今日のスラムが形成される。

（カースト構成）ペータには20カースト（市の標本調査では39カーストがあがっている）と1部族にイスラム教徒の合計22グループから構成される。市全体とペータのカースト構成を比較すると上層カーストは市が20.7%にたいしてペータは，0.7%，中層カーストは32.9%と41.2%，下層カーストは9.6%にたいして25.7%，指定カーストは14.8%が27.8%，指定部族は1.9%と4.6%となっている（表3）。これから明らかにペータでは上層カーストが極端に少なく，下層カースト，指定カースト，指定部族は逆に多くなっている。個々のカーストでも両者の差は大きい（表3）。ペータ内では指定カースト，指定部族は道路を隔てて他カーストと居住区が離れており，地区の縁辺部にある。彼らとの接触を不浄として忌み嫌う上位カーストの生活態度は変わっていない。この他にも各カーストは1ケ所に集中して生活する。ここでも先にあげたカーストによる住み分けは注目すべきで（図3），インドのスラムの特色である。この住み分け現象のみられないのはチャンディガー（Chandigarh[11]）やマドラス[12]である。

（ペータの生活環境）戸数1,170戸，世帯数では1,448世帯が暮らすペータ地区で，13カースト

表3 ペータのカースト別世帯数（1971年）
（ ）はイスラム教徒を除外したもの

カースト	世襲職業	世帯数	同比率	全市比率
上層カースト				
Brahmin	祭官	3	0.2	12.4
Kshatriya	農業	4	0.3	2.8
Vysya	商業	2	0.1	5.5
			(0.7)	(20.7)
中層カースト				
Kamsali	宝石造り	4	0.3	?
Reddi	農業	152	10.5	2.2
Kamma	農業	26	1.8	5.8
Telaga	農業	144	9.9	14.9
Kummari	壺造り	2	0.1	0.9
Nagasipu	農業	38	2.6	?
Yadava	牧畜	163	11.3	0.5
Gauda	椰子酒造り	4	0.3	?
Nagara	農業	3	0.2	?
Muttarasi	農業	12	0.8	?
			(41.2)	(32.9)
下層カースト				
Medari	篭造り	42	2.9	?
Palli	漁師	3	0.2	0.5
Rajaka	洗濯夫	22	1.5	0.9
Mangali	床屋	12	0.8	0.1
Vaddera	土工	263	18.2	1.7
			(25.6)	(8.3)
指定カースト				
Mala	織工	170	11.7	8.3
Madiga	皮革工	200	13.9	6.0
			(27.8)	(14.8)
指定部族				
Yerukura	豚飼育	61	4.2	0.9
			(4.6)	(1.9)
		(1330)	(100.0)	(100.0)
その他				
Muslims	農業	118	8.2	
		1,448	100.0	

とイスラム教徒の362世帯（全世界の25％），1,564人を対象としたペータ地区の標本調査によると住民の73.3％は持家，残りは借家に住んでいる。宅地面積は78.7％は25㎡（7.6坪）以下，14.6％は25㎡～42㎡（14坪），6.7％が42㎡～84㎡（28坪）で住宅も狭く，部屋数でみると71.6％が1室のみ，26.5％が2室，1.9％が3室以上となっている。そして99.2％が掘立小屋で，木・煉瓦造住宅は1％にも満たぬ状況にある。掘立小屋は無計画に建てられており，北西側を除いて真直ぐな道路はなく，雨季にはスラム全域が泥濘るみ，雨季以外でもあちこちに水溜りができている。クリシュナ川に近いが，河岸に障害物があってうまく排水できず，特別に排水施設もつくられていないためである。大部分の世帯は浴室がなく，ごく一部で家の脇に小さな囲いをつくり椰子の葉や竹を用いて浴室代わりとするが，これをもつのは標本調査では30％少々となっている。なかには簡易ベッドや柱に布をカーテン代わりとして水浴している。そしてそれを使用するのは女性に限られ，男性は道路上で水浴している。家庭で井戸，ポンプを所有するのは11％にすぎず，下層カーストのほとんどは共同井戸や水路の水を利用する。

家庭の塵芥は道路上に放棄されているが市当局はその収集には一切関知せずの態度をとり，各家庭ではせいぜい自分の家の前の道路だけをきれいにするだけである。この住民の利己的態度がよりスラム地区の環境を悪化させているのである。便所も煉瓦造住宅の6戸ほどを除いてなく，標本調査では対象世帯のすべてが便所を持たず，公衆便所も設置されていない。住民は河畔や運河堤あるいは鉄道用地で用を足している。子供は家の近くで排便をし，それが隣人間のトラブルの種となる。

しかし，このスラムの居住環境も非スラム地区と比較して必ずしも酷いとはいえぬ。それは，市内の中産階級の住宅地も稠密で，かえってスラムの掘立小屋でも壁や床を殺菌性のある牛糞を塗り込め，清潔さが保たれており，周辺の道路も清掃が行き届いているところもあるのである。非スラム地区の住民も市当局が不許可の土地を占拠する。当然，市は水，電力その他のインフラストラクチァーは提供しないし，スラム類似の環境となっている。

ペータには私立小学校（キリスト教ミッション経営）が1校。公立病院はなく，3名の医師が診療活動をしているが，そのうちの2名はペータに住居をおいている。

（ペータの人口流入過程）標本調査の資料から住民の出身地は Krishna 県をはじめＡＰ州の21県のうち10県に拡がっており，州外からは北隣りのオリッサ（Orissa）州から Brahmin 1世帯，ＡＰ州からビルマのラングーンに移住した Mangali の1世帯が戻った2例にすぎず，中都市ヴィジャヤワダの人口吸引力が広く州外部にまでは及んでいないこと，州都ハイダラバードの勢力圏には及ばないことを示している。

ペータ地区への流入の理由として(1)農村に仕事がなく，零細な農地では生活できないが77％，(2)一応仕事はもっているが，より高収入を求めてが8.3％，(3)ある程度教育を受け，技術をもち，職業訓練を受けた者が農村ではそれを生かせられ

表4　ペータスラム標本調査の概要（1971年）

カースト名	世帯数	人口	世帯当たり人口	就業人口 男	同就業人口	女	同就業人口	俸給職	日雇労働	カースト職業	ムータ労働	年収（ルピー）1,000以下	1,001-2,000	2,001-3,000	3,000以上
Kamsaii	2	8	4.0	4	2	4	-	- (-)	(-)	- (-)	- (-)	1	1	-	-
Reddi	50	201	4.0	108	70	93	-	5 (7.1)	(4.3)	- (-)	58 (83.0)	1	34	12	3
Kamma	10	46	4.6	24	17	22	2	- (-)	- (-)	- (-)	10 (62.5)	1	7	-	2
Telaga	30	114	3.8	55	35	59	1	1 (2.8)	3 (8.2)	- (-)	13 (26.0)	1	18	10	1
Kummari	2	8	4.0	4	2	4	-	- (-)	- (-)	- (-)	1 (50.0)	1	1	-	-
Yadava	55	233	4.0	106	70	127	-	3 (4.3)	2 (2.8)	- (-)	62 (88.6)	-	42	10	3
Nagasipu	15	54	3.6	26	20	28	-	1 (5.0)	1 (5.0)	- (-)	14 (70.0)	-	13	1	1
Medari	10	47	4.7	26	20	21	16	- (-)	- (-)	36(100)	- (-)	5	5	-	-
Rajaka	5	26	5.2	14	12	12	4	- (-)	- (-)	8(50.0)	8 (50.0)	-	4	-	1
Mangali	3	17	5.7	9	6	8	-	- (-)	- (-)	4(66.7)	- (-)	2	-	1	-
Vaddera	50	251	5.0	131	86	120	73	- (-)	4 (2.5)	59(37.1)	92 (57.8)	7	25	15	3
Mala	60	286	4.7	147	77	139	26	19(18.5)	14 (13.6)	- (-)	10 (9.7)	10	24	18	8
Madiga	50	186	3.6	90	56	96	17	6(8.2)	5 (6.8)	75(6.8)	20 (27.5)	28	22	-	-
Muslims	20	87	4.4	40	24	47	1	1(4.0)	2 (8.0)	- (-)	2 (8.0)	6	14	-	-
計	362	1,564	4.3	784	494	780	140	36(5.7)	34 (5.4)	112(17.6)	290(45.7)	63 (17.4)	210 (58.0)	67 (18.5)	22 (6.1)

ぬためが7.5%，(4)転任あるいは職場に近いが7.2%で，圧倒的多数が農村生活の貧困をあげている。

流入に際して，(1)単独でが30.8%，(2)配偶者・子供とが45.5%，(3)親戚とが22.3%，(4)村人・友人とが1.4%となっており，家族単位の移動が最も多いが，市標本調査では(1)が20.6%，(2)が55.1%，(3)が26.3%，(4)が0.1%と傾向としては大差はないが市では家族単位の比率が若干高くなっている。そして，流入者の72.2%は離村前に市内に親戚・知人などがいたが，これをカーストでみると中層カーストが68%に比べ低カーストは79%と高くなっている。農村部からの流入者のペータ定着の理由として，ムータ労働者は働き場である市場に近いことを，土砂採取労働者がクリシュナ川に近接することの利点をあげている。Rajaka はクリーニングの洗い場となる川，運河に近いこと，など職業でのメリットを重視するが，今一つの理由は掘立小屋を建てるための空地の存在することである。ペータは鉄道用地と道路建設局用地が拡がり，不法ながら格好の土地を提供したのである。

最初にこの地区に定着した Vaddera 住民は土地占有権を主張し，この地に愛着心を抱いている。そのため住民の80%以上はこの地区での定住を望んでいる。

スラム住民は教育，技術になんらの資格ももたぬ者が多く，その大部分は低カーストである。農村での貧窮生活から脱出し生きる道を求めて血縁や友人と移住してきた者が多いが，故郷に農地を所有する者は原則として単身で移住する。そして都市生活がある程度安定すると家族を呼び寄せる者がでる。つまり，スラムの暮しを農村生活の補完の手段と考えている。

（カーストと職業構造）ヴィジャヤワダ市は商業・交通の中心として発展してきたが，ペータ住民の職業も，この都市の性格と関係が深い。鉄道は赤帽と貨車の積荷の上げ下ろしなどに多くの肉体労働者を必要とするが，未熟練労働者にとり格好の職場となっている。バス交通も発達するが州道路輸送公社は鉄道と共に多くの熟練労働力・教育程度の高い人材を必要とする。タクシー，バス，トラックなど自動車運転手の雇用機会が増大し，都市活動の発展は事務職などのホワイトカラーの職種を生みだしている。都市の急成長は建設業を刺激し，その労働力需要として Vaddera を中心とする土砂採取業とそのトラックへの積み下ろしのムータ労働へと波及していく。この他にペータ住民の特色ある職業に廃品回収業がある。回収されたくず鉄は地元の商人が購入し，鉄工所に売るほかにビシャカパトナム港より輸出もされている。

次にペータ標本調査の資料をもとに各カースト毎の職業構造を人口の多い順に述べる。

Vaddera　263世帯，人口は約1,300人。世襲職業は井戸掘りや建築の基礎掘りなどの土工である。その世襲職業に働く者は37%，それと関連する土砂採取業が57.8%を占める。残りの5%はリキシャ車夫や日雇労働者である。この土砂採取業には10人から15人のグループをつくり，クリシュナ河床で土砂の積み下ろしの仕事を請負っている。作業期間は年間9ケ月ほど，雨季は作業が中止される。その間，市内で土工そして一部はリキシャ車夫として働く。

Madiga　200世帯，世襲職業の皮革工と履き

物造りを続ける者は７％以下，大部分は土砂採取業とリキシャ車夫として働いている。市職員とくず鉄売買に従事する者もいる。女性も17％が土砂採取業とタバコ工場の選別工として働いている。標本調査によると土砂採取業が27.5％，リキシャ車夫が18.0％で，ペータに住むリキシャ車夫の72.2％がこのカーストに属している。それはこの仕事に魅力をもつためである。なお，29％はその他の仕事で主として廃品回収業である。

Mala　170世帯。男性の多くは廃品回収業として働いている。この地区の廃品回収業は180人で，そのうち150人が Mala である。彼らはグループで村や町を巡回し廃品を回収する。特にくず鉄が重要で，これを地方商人―これには Mala の３名，Kamma が２名が従事する―に販売するが両者の関係は極めて緊密で売却の相手は固定している。地方商人は市内の問屋にそれを売り渡す。この問屋も Mala，Kamma の各１名が地方商人を兼ねている。この他にかなりが市職員，鉄道員，電力公社に勤務する。熟練労働者として鍛冶工，女性はタバコ選別工がいるが，その他は日雇労働者である。調査では19％が俸給生活者，37％が廃品回収業でこれは Mala がほぼ独占する。ペータ全体で熟練工は19％を占めるがその38.8％はMalaとなっている。このことは Mala が低カーストながら教育にも関心をもち，識字率も33.5％とスラムでは比較的高い数値を示すことと関連している。日雇労働者は13.5％，ムータ労働者は9.5％で，女性の54％がタバコ選別工，27％がその他の職業に従事している。

Yadava　世襲職業は完全に姿を消し，調査ではムータ労働者が 88.6％でこの職種は Yadara の比較が高い。俸給生活者と日雇労働者その他が11％で前者では商店店員，後者は荷車引きが６～７％となっている。

Reddi　男性の90％はムータ労働で10％が荷車引き，店員と日雇労働者である。調査では83％がムータ労働者，７％が俸給生活者，4.3％が日雇労働者との結果となっている。このカーストではかなりの者が今も故郷に土地を所有している。

Telaga　大部分がムータ労働者，他は自動車運転手や機械工など熟練を要する職種で，一部は荷車引き，日雇労働者である。調査ではムータ労働が37％以上，熟練を要する機械工，整備工，トラック運転手などが次いで多く17％を占めている。8.7％が日雇労働者で36％は雑多な仕事に従事する。１名だけは商店を経営している。

Yerukula　世襲職業は豚飼養と下肥収集とそれを肥料として販売するが，今も95％がこの仕事を続けている。

Medari　世襲職業の籠造りを女・子供も共に続けている。このカーストと Vaddera では子供のかなりが働いている。

Nagasipu　約70％がムータ労働者，他に俸給生活者，熟練労働者が各５％，その他が15％となっている。

Kamma　このカーストもムータ労働者が卓越（71.5％）する。２名のくず鉄商人と６名の燃料販売商がいる。

Rajaka　世襲職業の洗濯屋に60％が従事する。他に多いのはムータ労働者である。

Mangali　床屋が世襲職業で今も男性の多くが従事する。一部に熟練労働者とムータ労働者，そして唯一人の医師がいる。

Muttarasi　約半数が土砂採取，その他では日雇労働者が主である。

Kshatriya　４名のうち２名がトラック運転手，他の２名はムータ労働に従事している。

Kamsali　４名。うち２名がムータ労働，２名は日雇労働者である。

Gauda　４名。２名は世襲職業の椰子酒作りを続け酒を販売する。２名は日雇労働者である。

Brhamin　３名いるうちの１名が州電力公社職員，そしてオリッサ州出身者は砂糖菓子販売，今１名は個人教師をしている。

Nagara　３名のうち２名がムータ労働で後の１名は会社員となっている。

Palli　３名すべてがムータ労働者。

Vysyu　２名が共に世襲職業の商業を続け食料雑貨店を営んでいる。

Kummari　２名でムータ労働者とバターミルクの販売人である。

この他にイスラム教徒は農業から今は自動車運転手，機械工などの熟練労働者，この他にケロシン油販売，ムータ労働者と日雇労働者が約10％である。標本調査では男性の約半数が熟練労働者で，日雇労働者６％，ムータ労働者６％，32％はその他で，うちケロシン油販売が多くなっている。

以上の職業構成を要約すると次のように分類できる。

(1) ムータ労働者　卸売商，鉄道と深く関係するが，ペータ最大の職種で約45.7％を占めている。但し，土砂採取業も含んでいる。

(2) 世襲職業従事者　カーストの特質の一つである世襲職業に今も17.6％が従事する。Medari, Rajaka, Mangali, Madiga, Vaddera などはこの比率が高い。

(3) 熟練労働者機械工，整備工，タバコ選別工，自動車運転手などで6.3％を占める。

(4) 俸給生活者　5.7％を占め，公務員，公社職員，各種サービス業，教師などがあがる。

(5) 日雇労働者　リキシャ車夫（2.9％）やボーイ，メイドなどが多く5.4％を占める。

(6) その他　くず鉄販売，廃品回収業，荷車引きなどが目立つが15.5％となっている。

必ずしもカーストの世襲職業は守られていないことがわかるが，農牧業など都市でその維持が困難なもの，つぼ造りなど，近代工業の製品により伝統的製品が圧倒され消えた場合も少なくない。しかし，同一カースト成員が新しい職種に結集し，カースト的性格をもつものが現われつつあることは注目に価する。Madiga のリキシャ車夫などはこの例である。

市とペータを職業構成の面で比較すると，一般にスラム住民の多くがインフォーマルセクターと不規則部門に吸収される[12]ことは共通する現象であるが，ペータでもよくあてはまることがわかる。最低職種とみなされるリキシャ車夫や日雇労働者，荷車引き，掃除夫などは市の3.5倍も多く，彼らは当然薄給である。

ペータ住民を収入面からみると全体の58％が年収1,001～2,000ルピー（1ルピーは約11円），2,001～3,000ルピーが18.5％，1,000ルピー以下が17.4％，3,000ルピー以上は6.1％（表4）。3,000ルピー以上では Mala が36.4％と最も多く，必ずしもカーストヒエラルキーと収入との相関々係は高くない。指定カーストの Mala は教育レベルも比較的高いうえ，生活水準向上への意欲が高く，それが収入に反映しているようである。

スラム世帯の生活水準を知る今一つの資料として就業状況が重要である。これを市とペータ地区の標本調査の結果により比較すると生産年齢人口では市が58.0％にたいしペータでは61.4％となっており，そのうち就業人口は市が27.5％にたいしペータは40.5％とかなり高い。男性の就業人口は98.4％と高く，ほとんど失業者はいないことになる。15才以下の幼少人口の就業者は非スラム地区では皆無に近いがペータでは Vaddera と Medari に限られるがかなりの子供が働いて家計を助けている。非スラム地区の男性がペータに比べて就業人口率が低い理由は，教育程度の高い者，技術を有する者が職業選択で公務員その他の安定した職種を求めて選り好みをすることにある。

市の調査ではその職種により次の5つに分類している。

(1) 最高職種…医師，技師，教師，国家公務員（1.2級職），弁護士，企業管理職，ジャーナリストなど。

(2) 高位職種…セールスマン，国家公務員（3級職），事務員（3級），商店経営者，ビジネスマン，鉄道員（3級）など。

(3) 中位職種…ブルーカラー労働者（運転手，修理工，工場労働者など）。

(4) 下位職種…世襲職業，国家公務員（4級職），鉄道4級雇員，夜警，大工，仕立師，行商人，カースト・サービス職業など。

(5) 最下位職種…リキシャ車夫，日雇労働者，荷車引きなど。

表5　職種階層区分

職種	全市	ペータ
最高位職種	5.73	極小
高位職種	34.14	極小
中位職種	14.01	5.0
下位職種	25.68	25.0
最下位職種	20.41	70.0

（ペータと社会組織）スラム住民は劣悪な生活環境の改善を望み，高い経済生活への希求には強いものがある。しかし，行政当局のスラムクリアランスをはじめとするスラム改革計画はスラム住民の生活環境をかえって悪化させる場合が多く，その動きにたいする住民の阻止運動，鉄道局その他の土地不法占拠者にたいする追いたてへの抵抗

など幾多の社会問題を抱えている。そして，その対応策として住民の力を結集させる必要がある。そのためには運動の中核となるべき社会組織の整備が望まれる。ペータには，そこまでの意欲の高揚はないが中核となりうる可能性を秘めた組織としてはカーストパンチャーヤト（caste panchayat)[13]，労働組合，社会奉仕団体などがあげられる。ペータではカーストパンチャーヤトをもっているのは Mala, Madiga, などで， Yerukula は存在こそすれ全く機能していない。この組織は概してペータでは有効に機能していない。これに反して労働組合はムータ労働組合，土砂採取労働組合，廃品回収業組合にリキシャ車夫組合など職業ごとに結成されている。これらの組織は１つ又は複数のカーストが支配しており，（例えばムータ労働組合の場合は Reddi と Yadava）全スラムを結集する強固な団結力はみられないようである。その指導者にはインド共産党[14]，インド共産党（マルクス派）[15]，国民会議派の党員が活躍している。この党員の活動はペータ住民に大きな影響力をもっている。なかでも Mala は意識が高く共産党支持者が多いが，共産党（マルクス派）や国民会議派も一部の住民に支持者をもっている。Madiga と Vaddera は共産党（マルクス派）次いで共産党に共鳴している。概して共産党の支持率が高く，次いで共産党（マルクス派）となっている。スラムの生活環境改善に無関心の市当局の態度から共産党にたいする期待が強く，それだけに勢力浸透の機会が大きくなっている。

この他にボランティア活動としてスラム外部からはアンベドカル青年協会（Ambedkar Young men's Association）とサンギーカ・セバ・ダーラーム（Sanghika Seva Dalam）が働きかけたことがあったが今は活動を中止している。スラム内部からおこったものに Mala と Madiga の有識青年により始められた社会文化活動，Mala 青年20名で始まった図書館建設運動があったが，これも活動は中止され，リーダーシップを握る人たちの熱意は継続し難いようである。

（スラム再開発と住民意識）まず，ペータ住民がこの地区に抱く定住への意欲を考える。Vaddera は隣接するクリシュナ川が土砂採取現場だけに，この地を離れられず，女性もかなりがこの仕事に従事するが，乳児を抱えた母親は授乳のため家に戻る必要がある。これが可能なのも家が近いからである。彼らのペータへの愛着心は先に述べたが，ここに寺院を建立したのも定住し続けんとする意志の表現とみることができる。Yerukula は豚を飼養するが，その放牧地が得られ，かつ飲料水の有無が大切である。クリシュナ河床がその適地で夜露をしのぐ場所さえあれば自由に豚を放牧できるこの地に近いペータを出ることを強く拒否している。しかし Vaddera の青年は激しい肉体労働の土砂採取業を嫌っており， Yerukula の青年も世襲職業が賤業とみなされる豚飼養と糞尿処理だけにこの仕事を嫌忌し， Vaddera と共に適当な職があり，住宅が入手できれば市内の何処にでも移る意志をもっている。しかしスラムの青年は一般に無教育で職業訓練を受けたことがなく技術はもっていない。そこでここを出るとしても映画館の闇切符売りや綿花市場を対象にした賭博といった裏の生活に限られる。

ムータ労働者や廃品回収業はその仕事がグループ作業のため，グループの維持との条件さえ満たされるならばペータを出る意志をもっているようである。中層カーストの Yadava, Reddi, Telaga の人たちは適当な土地があればここを出る意志がある。それは，彼らのペータ居住時期が比較的新しいこと，鉄道用地を占拠して居住したが，鉄道当局は彼らを退去させんとするが失敗に終っている。しかし強制追い立てを恐れ，引越しの準備をしたほどである。それだけに強制執行への危惧をもっているようである。上層カーストも条件が整えられれば移動を受け入れると考えられている。それはここを出ることで指定カーストから離れられることを期待しているようである。しかし条件というのが市当局が適当な代替地や住宅を無料あるいは低価格で提供するということであればその期待は空しいといえる。

発展途上国のスラム再開発事業の方法には２通りある。その１つはスラムクリアランスによるもので，これまで多くの都市で採用されてきた。それは住民をスラム地区から都市郊外の新しい地域に移動させるもので，市内に適地が求められぬ状況のなかでは当然都心からの遠隔地が選ばれる。新地区は職場から遠距離のため住民には悪評でそこに定着しない者が多くなっている。今１つの方法は職場に近接した土地に移住させるもので，一

般に適地が得られず，実例は多くないが，マドラスで市当局が漁民をマリナビーチ近くに移住させたのがこの例にあげられる。

ビィジャヤワダ市ではMutyalampadu Housing Colony の建設がスラムクリアランスの例にあげられる。1960年代に1,784のスラム世帯を3運河の集まる市域の東縁部に住宅地を建設して強制移住させた。各家族に1区画110㎡の土地を標準的な借地料で貸与した。しかし移住後かなりの住民が通勤に不便なこの土地を売却するか他人に貸して元のスラムに舞い戻っている。ただ，この土地の権利変更は許可されず非公式になされている。そして多くの土地は中産階級の手に帰している。近くに適当な仕事が得られず，職場に遠いだけにここに定着することには無理があったのである。この事例のように発展途上国のスラムクリアランスは失敗に終ることが多い。しかし，スラムが共産党の有力支持基盤とみなされるだけに，共産党地方組織の弱体化を意図した国民会議派政府と彼らに支配されている市当局がスラムクリアランスの実施で住民を分散させんとする試みは今後も政策として採用される可能性はあるのである。一方，共産党地区指導者は，逆にこの噂を政治的立場から住民に広め支持を強固にせんとするともいわれている。

5. おわりに

これまでにヴィジャヤワダ市のスラムの実情を，特にペータ地区の生活環境，住民の流入過程，職業とカース構成などを中心に若干の考察をすすめてきた。一般にスラムは怖いところ，他所者は足を踏み入れてはいけない危険な場所，そして，そこは犯罪の巣窟と考える者も少なくない。ペータでも，かつては売春，スリ，賭博，貨車泥棒や少年非行など，各種犯罪の多発地であったことは事実である。ペータ地区に入った者が持ち物を盗まれ，特に夜間に1人でここに外部の者が入ることはなかったという。しかし1967年頃から地区指導者を中心とする犯罪撲滅の努力が続けられてその成果があがっている。今では治安も随分良くなっている。しかし住民の経済条件の向上もこの成功に与るところが大きいものと思われる。ただ，今も貨車泥棒だけは別のようである。それはクリシュナ川鉄橋を夜間，列車は徐行して渡る。その間にロックをはずした貨車から積荷を河床に放り投げる。そして盗品は直ちに故売人に売却してしまう。鉄道公安官が彼らと共謀しているという噂もあって，この犯罪だけは無くなっていないと言われている。

しかし，スラム居住者が増加し，定職を持ち，強い血縁とカースト的紐帯のなかで，反社会的活動に走ることを制止する環境が生みだされている。そのため犯罪発生率も非スラム地区に比べて決して高くない。ヴィジャヤワダ市のスラムはインドの大都市と比較して就業条件も良好であり，スラム地区には明るさがあり，特に深刻な状況にはないようである。ただ，これがインドの中小都市に共通するか否かは他都市の研究にまつほかはない。

（にき　としあつ・神戸市立工業高等専門学校）

（注）

1）Rao, Nageswara K.（1985）: Evolution and Dynamics of the Krishna Delta, The National Geographical Journal of India, 31－1

2）Babu, D. V. L. P.（1978）: Geomorphology of the Krishna-Godavari Delta Region Interpreted from Landsat Imagery, The National Geographical Journal of India, 24－3, 4

3）Reddi, N. B. K.（1970）: Urban Evolution Growth Pattern and Urbanization trends in the Krishna and Godavari Deltas. The National Geographical Journal of India, 16－3, 4

4）テルグ語の新聞はすべて当市で発行されている

5）指定カースト（Scheduled Caste）は前不可触民（ex-untouchable）の法律上の呼称。ハリジャン（Harijan）とも呼ばれる。

6）指定部族（Scheduled Tribe）はインドの先住民ともいわれ，多くの部族がいる（1981年で約5,200万人）が5）と同様に彼らの法律上の呼称である。

7）Pakee とは指定部族の1つで，廃品回収を主業としている。

8）ムータ（Mutha）労働とは、トラックや貨車の積荷の上げ下ろしの仕事で、一般に10～15人のグループで働く。そのリーダーは Maistry と呼び，請負い仕事となる。一種の組合を結成しており、加入者がグループを離れるとき、代わりを選ぶ権利をもち，その権利は他人に売却できる。ムータとは一群を意味する。

9）拙稿（1988）：インドの都市問題（1），兵庫

地理第33号，46ページ

10) Weibe, Paul D. (1975) : Social Life in an Indian Slum, Delhi, Vikas Pub, House.

11) D' Souza, Victor D. (1976) : Urban Development in India, Muttangi, P. K. (ed.) : Urban Development-A Respective. Bombay Tata Institute of Social Sciencess.

12) 前掲9) 40ページ

13) パンチャーヤトとは本来五人委員会を意味するがカースト毎の自治組織で長老数名により構成された。今は憲法で村落パンチャーヤトの組織が義務づけられており，村民の選挙で委員を選出することになり，今はカーストから村議会としての役割に変化している。

14) インド共産党（Communist Party of India, CPIと略称）インド共産党左派。

15) インド共産党(マルクス派〔Communist Party of India, CPI(M)と略称〕インド共産党右派。

文 献

Ramachandaram, R. (1976) : The Internal Structure of a City in Transition-A Case Study of Vijayawada City, The Indian Geographical Society, Golden Jublee Volume, University of Madras.

Rao, Ranga K. and M. S. A. Rao (1983) : Cities and Slums, New Delhi。 Concept Pub. Co.

Rao, V. L. S. P. and R. Ramachandaram (1974) A Report on the Socio-Economic Survey of Vijayawada City, Dept. of Human Geography, Delhi School of Economics (謄写版)